

被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
 幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
 被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット NEWS LETTER

第32号 2003年4月17日(木)

発行 歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)
 TEL/FAX 078-803-5565



史料ネット神戸センターの新事務局がある
 神戸大学文学部地域連携センター



「震災資料の保存・活用に関する地域連携研究会」の様子
 (2003年2月19日撮影、人と防災未来センターにて)

目次
巻頭言 うねりの中での試行錯誤 藤田明良... 2

特集
歴史文化をめぐる地域連携事業の展開
 進む「官」「学」「民」の連携 松下正和... 3
 震災資料の保存・活用に関する地域連携研究会の開催 辻川 敦... 4
 協議会参加記 岡崎正雄... 5
 「地域歴史遺産の新しい活用のあり方を考える」参加記 豊田美香... 5
 史料館ボランティア参加記 田井東浩平... 6

目次
 古文書と私 静 剛... 7
 奥羽史料調査会の理念と活動 佐藤大介... 8
 史料保存にかかわる心配事 小田康徳... 9
 関連団体・会員からの情報
 西摂研究会参加記 高久智広... 10
 「第4回神戸都市史研究会」参加記 三村昌司... 10
 2003年度大阪歴史学会大会のご案内... 11
 京都民科歴史部会5月例会のご案内... 11
 活動日誌・受贈図書紹介... 12
 第4回 震災復興市民歴史講座のお知らせ... 13
 2003年度総会とフォーラムのお知らせ... 14

うねりの中での試行錯誤

歴史資料ネットワーク事務局長 藤田 明良

「...この原稿を書くためニュースレターを二、三号読んでみたが、読みにくい。まるで官庁か会社の広報みたい。やたらと難しい言いまわしや漢語が多く、遊び心がなく一生懸命すぎてシンドイ...」。前号に載った歴史講座の市民参加記の一節です。

歴史資料ネットワークが会員・サポーターによって維持される新体制になってから、まもなく一年になります。この一年、総会で決まった方針にそって、被災史料の整理と追跡調査、震災記録の保存と活用などを進めてきましたが、なかでも年4回の歴史講座を核とした市民との連携に特に心をくわいてきたつもりでした。学会という研究者団体の中から生まれた史料ネットが、地域社会にも軸足を築いていくのが、この改組の大きな柱だったからですが、市民の側の違和感はまだまだ大きいようです。

大学は今、国際競争力だけでなく社会貢献力が問われており、史料ネットの事務局（神戸センター）がある神戸大学文学部にも今年1月17日、地域連携センターが発足しました。自治体やNGOなどとの共同事業・研究を推進する機関で、史料ネットも事務局をここに移し、震災直後から取り組んできた巡回調査や地域史掘り起こしを発展させる共同プロジェクトを開始しました。ネットのボランティアだった大学院生たちも、調査員や補助員として参加しています。また、自治体のなかにも、住民との発掘成果の活用協議やボランティアの力をいかした学習施設構想など、市民との積極的な連携へ姿勢を転換させたところが出てきています。

財政逼迫だけが変化の原因ではありません。前号に載った古文書サークルや史跡を活かす街づくり活動のように、「史料」とじかにアクセスしたい、生活のなかに「歴史」を取り込みたいという思いが、市民のなか地域のなかで大きなうねりとなってきています。「御説拝聴」型では満足できなかった市民たちと、専門家はどういう関係を築いていけばいいのか。そのことを真剣に考えないと、歴史学も社会との接点を失ってくような気がします。

個人として史料ネットを支えてくれる会員は現在114名（目標200名）。このほかサポーターが30名（同200名）、ニュース講読者が64名（同60名）で、残念ながら当初目標の半分ほどです。財政も縮小せざるを得ず、平日フルの専従アルバイトを置く予定だった事務局も、週4の半日開室となってしまいました。ただし、地域連携センターで仕事をしている人たちをはじめ、院生など若い人たちのボランティア精神のおかげで、赤字は免れそうです。実は新体制になってから、史料整理や歴史講座の運営などにも参加してくれる院生・学生が増えており、この点では将来に希望をつないでいます。また、来るべき大災害への対応のため創設した「緊急対応基金」100万円も、今年度は手を付けずにすみそうです。

問題は会員やサポーターを増やすこと。「最近のニュースレターはカラー写真もあり人目をひく。字もやや大きくなり、編集のやり方も変わってきたとおみうけした...」。冒頭で紹介した辛口批評の市民も、新生ネットの変化を見守ってくれています。期待に応えられるよう、これからも試行錯誤を続けていくつもりです。

（ふじた・あきよし / 天理大学国際文化学部助教授）

特集

歴史文化をめぐる地域連携事業の展開

進む「官」「学」「民」の連携

～神戸大学文学部地域連携センター主催の二つの協議会～

松下 正和

神戸大学は文学部を中心に、阪神・淡路大震災直後から、兵庫県・神戸市等の自治体、N G O、市民と連携し、被災歴史資料の保全、歴史遺産を活かした街づくりプランの作成、大震災の記憶の継承などの事業を進めています。神戸大学文学部は、平成14年度大学改革等推進経費の支給を受け、これらの経験をさらにいかにするための基盤整備として、地域連携研究員制度を創設しました。2003年1月17日には「神戸大学文学部地域連携センター」が開所し、史料ネットの事務局も、1月24日からセンター内に設置していただいております。史料ネット事務局員の人見佐知子さん（神戸大学大学院文化科学研究科院生）も地域連携研究員として活躍中です。他にも、史料ネットはセンターの木村修二地域連携研究員や神戸市文書館と連携して、古文書整理事業や震災以降の東神戸地域における文献資料調査を実施するなど、一層の協力関係を構築しています。

このセンターを中心として、先日大学・自治体・市民との間での情報交換及び連携のあり方をめぐる大規模な協議会が二つ開催され、史料ネットからは私松下が代表で参加いたしました。

第1回「震災資料の保存・活用に関する地域連携研究会」

（2003年2月19日、於：人と防災未来センター）

第1回「歴史文化をめぐる地域連携協議会～地域歴史遺産の新しい活用のあり方を考える」

（2003年3月2日、於：神戸大学瀧川記念学術交流会館）

の協議会は、関係10機関（尼崎市立地域研究史料館・伊丹市立博物館・神戸市文書館・神戸大学都市安全センター・神戸大学附属図書館・西宮市史編集室・人と防災未来センター・兵庫県立図書館・兵庫県公館県政資料館・史料ネット）と「神戸大学文学部地域連携センター」による震災資料の協議会で参加者はスタッフを含め約30名でした。

の協議会は、被災地を中心とした自治体・市民団体・N G Oと神戸大学文学部の計27機関（参加者約70名）が一堂に会し、歴史文化遺産の保存活用についての情報交換や「官」（＝自治体）・「学」（＝大学）・「民」（＝市民団体・N G O）間の新たな連携の方法について議論を深めました。このような大規模な協議会は、兵庫県内では初の試みであり、新聞紙上にも報道されるなど大きな反響がありました（『神戸新聞』2003年3月3日付朝刊）。また、参加者からは継続的な開催を望む声が多く寄せられ、概ね成功裡に終わりました。

史料ネットはN G Oの立場から参加し、当日は松下が「史料ネット活動について」と題して報告いたしました。史料ネット神戸センター事務局の所在の変遷、震災直後の活動（被災史料レスキュー・パトロール・仮整理作業・市民講演など）、昨年の改組後の活動などをたどる中で「官」・「学」・「民」との連携のあり方の一例を提示しました。また、「官」・「学」と我々N G Oとの関係・役割分担などのあり方について議論を深めてほしい、歴史文化に関わる様々な知的・人的蓄積を有する大学がそのノウハウを公開し、その窓口として地域連携センターがその役割を担ってほしいなどの提言をしました（報告の詳細は『平成14年度大学改革等推進経費報告書 歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業』<神戸大学文学部、2003年3月>に掲載しています）。



本号のニュースレター特集では協議会当日に参加された方々に、協議会での議論をふまえて、ご提言を寄稿して頂きました。の協議会の概要については辻川敦さん、の協議会については岡崎正雄さん・豊田美香さん・田井東浩平さんに、ご報告をお願いいたしました。ご味読ください。

（まつした・まさかず / 神戸大学大学院・史料ネット運営委員）

震災資料の保存・活用に関する地域連携研究会の開催

辻川 敦

去る2月、人と防災未来センターにおいて、「震災資料の保存・活用に関する地域連携研究会」が開催された。神戸大学文学部による地域連携事業の一環として、阪神・淡路大震災に関する資料の保存・活用に取り組む関係諸機関が集まり、現状と課題について情報交換・意見交換を行なおうというものであった。

研究会の概要は、以下のとおりである。

日時 2003年（平成15）2月19日（水）午後1時30分～5時
場所 阪神・淡路大震災記念・人と防災未来センター セミナールーム
内容 趣旨説明 奥村弘氏（神戸大学文学部地域連携事業代表者）
人と防災未来センターの概要説明 村田昌彦氏
各機関の現状と課題
神戸大学附属図書館震災文庫 岡風呂 賢氏
兵庫県立図書館 宮本 博氏
兵庫県公館県政資料館部門 廣利 靖弘氏
人と防災未来センター資料室 伊藤亜都子氏
西宮市史編集室 増原 敬子氏
伊丹市立博物館 和島恭仁雄氏

意見交換
収蔵庫見学



報告中の辻川氏

研究会の参加者は、上記報告機関のほか、神戸市文書館、尼崎市立地域研究史料館、神戸大学都市安全研究センター、歴史資料ネットワーク、ならびに主催者である神戸大学文学部地域連携センターのスタッフであった。各機関からの報告においては、震災に関する図書、公文書、民間諸資料などの収集・保存・公開の状況、ならびに自治体史編さん・刊行事業における震災資料および体験聞き取りの掲載の様子が報告された。

震災に関する資料の保存や体験の記録化は、震災が発生した1995年以来、さまざまな公的機関や歴史研究者・史料保存関係者、そしてボランティアをはじめとする民間団体によって取り組まれてきた。今回の研究会もまた、従来からのこういった流れのなかで、あらためて公的機関の取り組み状況にポイントを置いて、おおまかな現状把握と課題の明確化をめざしたものである。その意味でも、参加諸機関のネットワークを持続していくと同時に、研究会において提示された現状と課題を的確にまとめて、関係各方面に対してきちんと提起していくことが重要であろう。

また、会場を提供した人と防災未来センターの資料室の今後も、注目される場所である。資料室開設に先立つ、（財）阪神・淡路大震災記念協会による震災資料調査・収集事業の概要は、その担当者であった佐々木和子氏による報告「阪神・淡路大震災を未来につなぐ - 震災資料収集事業の経験から -」（『地方史研究』299号、2002年10月）にまとめられている。そこにも記されているとおり、数年間にわたってかつてない規模により取り組まれたこの調査・収集事業は、数年間にわたって延べ数百人の調査員を動員し、広く震災被災地各地において資料を所蔵する団体や個人を対象に取り組まれ、紙資料、写真資料、映像・音声資料など約16万点、刊行物約2万5千冊を収集するという大きな成果をあげた。この事業の立案・実施に対して、外部の歴史研究者・史料保存関係者を委員に委嘱して専門的立場から調査検討を行なった研究会の報告書が、『「震災資料の保存・利用、及び活用方策研究会」報告書』として、2002年3月に記念協会から発行されている。そこにおいて示されている方向性が、今後の資料室に継承され活かされていくことを望みたい。

（つじかわ・あつし / 尼崎市立地域研究史料館、史料ネット運営委員）

協議会参加記

岡崎 正雄

「全ては阪神・淡路大震災から始まった」と筆者はじめ参加者全員が改めて認識した一日であった。震災後のあらゆる取り組みが、今日の地域の見直し・町づくり・歴史文化財遺産の新しい活用の試みへの流れを作り出してきた。

協議会は神戸大学が歴史文化をめぐる地域連携の在り方・役割を模索するもので、地域歴史文化遺産の活用を意識し、役割を担っている自治体・博物館・市民・NPOと共に連携できる可能性を示した。

中でも、流通科学大学の長山さんの大阪市平野の町ぐるみ博物館での経験から「学者と行政を信用していない住民の視点」から学ぶ方向や、「もっと手ごわい市民を入れて、行政や大学が連携を問うてみる視点が必要である」との発言が強い印象を受けた。

また、尼崎市富松城跡を活かすまちづくり委員会の善見さんから「仲良く行政とやっていく」、「主体は住民自らで、住民が次世代へとつないでいく」と強い決意を述べられていた。まさに地域づくりは住民での意識があり、大学との連携を進められている強さを表現されていた。

その連携を進めている神戸大学の市沢さんから富松城ヴァーチャル博物館づくりの中で「市民の間で博物館のイメージを深める。その担い手を市民側で作る。市民のエスカレートする意識を自治体、大学が受け止められるか。そこに大学の責任と役割が大となる」とまとめられている。

博物館の実践例と学芸員から「地域の課題に応える博物館を目指す」など今後の問題提起をされている。また、現在構想中の県立考古博物館（仮称）の先行ソフト事業として行っている「考古楽



者」養成セミナーの報告を行った県教育委員会の種定さんからも「みんなで作ろう考古博物館」を合言葉に考古楽者の皆さんが、「自己実現と社会参画の場を獲得できた実感されたときこのプロジェクトが成功したといえる」と締めくくられた。

いづれも、私どもが取り組もうとしている歴史文化遺産活用構想・県立考古博物館（仮称）建設への重要な視点を示されており、今後の協議会での検討にも積極的に参画して参りたいとの思いが強くなっている。

（おかざき・まさお

／兵庫県教育委員会文化財室）

「歴史文化をめぐる地域連携協議会」の様子

「地域歴史遺産の新しい活用のあり方を考える」参加記

豊田 美香

平成7年の夏頃だった。神戸大学の奥村先生より行政資料室（当時）へ「西宮市内でも資料のレスキューできませんか。」という連絡があった。毎日解体されていく家々を目の当たりにしており、重要性も緊急性もわかっていたが、結局何もできなかった。いまでもじくじたる思いを抱いている。その後、ひょうご 21 世紀創造協会の調査員の方が見えて、西宮市の震災資料を調査するという。もう無理なのではないかと思っていた。ところが、昨夏「人と防災未来センター」を訪れ、リストをみてガクゼンとした。何と多くの人々が、何と様々な資料を持ち続けていたのかと。

この資料の発見をきっかけに、様々なつてを得て編集室でも調査を行っている。話を聞きながら、8年たったいまでもその記憶は鮮明で、資料を残す思い、意志の強さを感じ、あらためて、この震災の人々に与えた影響の大きさを知ることになる。8年前にはできなかったが、いま、人々の話を聞き、資料を収集することで、埋め合わせをしたいと考えている。だが、資料集として編纂するのは非常にむずかしい。資料が重すぎる。伝えたいという思いをたった250頁で表現できるのか。

『西宮現代史』に収録する震災資料は、防災に役立てて欲しいという願いを込めて編集している。ここで前年度に刊行した第二巻について紹介したい。

資料集では震災前夜、震災勃発、初動体制、復旧から復興へという構成になっている。当時の市長は震災関連のメモ、資料すべてをファイルに残した。数多くの手書メモはここから収録した。幹部の情報として貴重である。しかし1月17日の記録資料は、昼頃からしか残っていない。17日深夜ようやくまとまった情報は、「(水)五管海上保安本部 23時、40トン大阪より、鳴尾護岸、甲子園フェリーに(中略)他都市 姫路、西脇、大阪市(2トン)1トンタンク車、ガソリンなくなり車動かない(中略)(家下敷)70ヶ所未着手、明朝7時より再開、とりあえず本日は中止(消防局)189の現場、15未確認(中略)被害状況245人確定、100人、家屋850棟、避難者1万3000人 23時現在」とある。被害状況の数字のうち、245人は死者数、100人は行方不明者数である。当日深夜になっても実態がつかめていなかったことがわかる。また、姫路や大阪からの距離でガソリンがなくなる、下敷きになっている人がいても中止しなければならない、確認された死者数が245人、避難者が13000人。……。

この事実複雑な思いを抱く者は数多い。だから何としても知ってもらいたい。このような人災は避けたい。以前「防災は想像力をたくましくして考えてほしい」という言葉をとて印象深く聞いた。この資料集をそのように活用してもらいたい。詳細は市のホームページに掲載している(西宮市って 市史編集室)。

第三巻では市民生活を中心に資料を掲載する。学校が避難所になるとき何が要請され何が問題点になるのか。非日常でも日常のコミュニティの関わりが明暗を大きく分けると思われる。また住宅の再建、まちづくりにおいてもそれは重要な位置をしめる。キーワードはコミュニティ。期待していただきたい。

さて、ここまでが西宮市としての現在の活用方法である。今後どうするかについては全く未定であり、「人と防災未来センター」の公開方法を参考にしたいと思っている。ただ、センターの閲覧に関しては「個人情報」という枠でとらえず、できるだけ公開する方向でお願いしたい。調査の過程で知った震災資料を残した人々の思いを考えると、展示を見るだけでは伝わらないと思うので。

(とよだ・みか/西宮市市史編集室囑託)

西宮市の「市史編集室」のホームページURLは、<http://www.nishi.or.jp/~shishi/>です

(編集部注)

史料館ボランティア参加記

- 第1回地域連携協議会を中心に -

田井東 浩平

今年の1月から尼崎市立地域研究史料館のボランティア活動に参加している。きっかけは、私が現在大学院で研究している「地域の歴史資料の保存と活用」の方法論について現場の方々との接触から見識を深め、多くの情報を得たいということ。そして、資料の整理や目録作成といった実際の作業を経験することで私自身の幅を広げたいということであった。史料館に通い始めて3ヶ月余り、現在尼崎市大庄西町在住の小西光信氏が寄託された絵葉書の整理、目録作成を担当している。関西圏を中心に昭和前期頃の全国各地の名所、催し物をビジュアルで垣間見ることができ、非常に興味深く、おもしろい。毎回、新たな発見と驚きの連続であり飽きない作業である。

3月2日、同館職員辻川氏のお誘いにより「第1回歴史文化をめぐる地域連携協議会」に参加する

ことができた。地域の歴史資料の保存と活用について阪神・淡路大震災以降の史料ネットでの教訓を生かし、いかにして自治体、研究者、地域住民の連携を密に情報を共有していくかということに興味に各分野の報告と討議がなされた。今回の会議を通して地域の歴史資料を後世に残していく上で、ボランティアなどの様々な形の中で地域住民が主体となって進めていくこと、そのためには自治体、関係施設がうまくサポートしていくことの重要性を改めて強く感じた。特に、文書館的機能をもつ施設を持たない自治体や行政側の資料保存に対する認識不足の中で、地域住民の存在は大きな役割を担っているように思う。

先日、愛媛県の資料保存運動の動向を探るため、愛媛に行く機会を得た。そこで、熱意ある研究者、地元の郷土史家の方々によって地道に裾野を広げ、地域の関心を高めていく草の根運動の取り組みを見た。平成11年に開設した町立の城川町文書館では、館専任職は置かれず、歴史に興味があり史料調査に参加すれば誰でも「館員＝（無給のボランティア）」になれ、これを愛媛県下の学芸員らがサポートしていくというユニークな試みがなされている。まさにボランティア主体型の資料保存と言える。また、平成13年の芸予地震における愛媛資料ネットがスムーズに展開された要因には、それまで地道に在野の裾野を広げたことで、被災資料の救出を進める愛媛資料ネットの活動に多くの人々の理解を得ることができたことが幸いしたと聞く。こうした草の根運動が実りつつある事例を目のあたりにしたことにより、私は今回の会議で論点となった館とボランティアの協働のあり方や関係機関と地域住民の連携の必要性についてより深く理解することができた。

今後、阪神間を中心に資料保存運動が活発化し、地域住民を巻き込んだ取り組みを進めていくためにも今回の会議のような情報の共有、議論の場が増えていくことを願いたい。一方で、私が現在置かれているボランティアとしての立場を通して、ボランティアで参加する地域住民側の目線から見たボランティアの存在意義、あるいは資料保存の意識を感じとることができればと思う。

最後に尼崎市立地域研究史料館という出会いを与えて下さいました尾立和則氏、まだまだ未熟な私にニュースレターへの投稿機会を与えて下さいました辻川敦氏をはじめ史料ネットの方々へ深く感謝申し上げます。

(たいとう・こうへい / 京都造形芸術大学大学院院生)

古文書と私

静 剛

私と古文書の出会いは昨年7月からです。きっかけは院試に必要でその後の研究のためにも勉強をしたいと指導教官の岩城先生に相談をし、尼崎市立地域研究史料館の「古文書を読む会」を紹介して貰ったのがきっかけです。そんな私的な動機から古文書に触れたわけですが、これが全く読めない。そうして苦しんでいる中で、他の古文書を読む会の人々が集まる会に参加し、そこから史料ネットの存在を知りました。そこで私は初めて史料ネットの存在を知り、会員となりました。

現在は会員として神戸大学で月1回、史料整理のお手伝いをさせて貰っています。最近ほんの少しだけ読めるようになってきて、又、自分の力を試す場も確保でき、古文書を読むのも少しは楽しくなりました。しかし、一つ読める

とその次が全然読めないという悪戦苦闘を日々続けています。そんなまだまだ足手まといの私を神戸大学の河野さんや添田さんがやさしく？指導して下さい、すぐに諦める私も何とかやろうと思って頑張っています。皆さんも是非一度神戸大学に足を運んで頂き、一緒に史料の整理に御参加下さい。次は4月12日(土)10:00～3:30頃に行います。のぞかれるだけでも構いませんので是非一度、ご覧下さい。

(しずか・つよし / 大阪教育大学3回生)

文中の4月12日の史料整理は4月13日(日)に変更し実施いたしました。今後の日程等は以下ようになっております。詳細は史料ネットホームページにも掲載されていますので、

そちらもご参照ください。

日時：5月10日（土）、6月14日（土）、7月12日（土）の午前10時～午後5時

場所：神戸大学文学部古文書室（文学部本館4階、JR六甲道駅・阪急六甲駅より神戸市バ

ス36系統「神大文理農学部前」にて下車）。

参加にあたっては、事前に史料ネット（tel&fax:078-803-5565、e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp）まで連絡をお願いします（編集部注）

奥羽史料調査会の理念と活動

佐藤 大介

奥羽史料調査会は、2000年12月より活動を開始した、仙台地区を中心とする各大学の院生・学生・教官によって構成されているボランティア調査会である。

活動の目標は、東北地方における史料の発掘と調査を行いながら、それらの保存と調査成果の地元への還元につとめ、さらに史料調査上の理念の普及、学生・院生・研究者各人の史料調査能力の実践を通じた向上、積極的な史料の学術的活用をはかっていくことにある。

調査会が活動のフィールドとするのは、会の名前にもなっている「奥羽」、すなわち東北地方（その周辺地域も含む）である。東北地方には、このような史料調査会はいままで存在しなかった。したがって東北地区の学生・院生ほか諸研究者にとっては、実際の史料調査に関わる機会も少なく、せっかく学習した史料調査上の理論を実践する機会も、それだけ乏しかった。さらに、現在まで長い年月を経て、伝存されてきた歴史史料一点一点に宿っているかけがえのない大切さを、調査の現場において、生の史料群や、それら史料を受け継いできた地域のひとびと、あるいは歴史資料を受け継がれてきた環境と、じかに対面する中で実感するような経験も少なかったのである。

また、東北地方ではその広大な地域に対して、学術研究機関・史料保存機関や専門研究者の数が少ない。特に現在も各地に眠っている地方資料については、関東、関西をはじめとする他の地域と比べてきわめて不十分な調査しかなされていない。一方で、資料の破損や劣化は確実に進んでおり、歴史への関心の低さなどによって廃棄され散逸する文書が跡をたたない。このことは東北地方の人々が積み重ねてきた歴史と文化が、永久に消え去る危機に瀕していることを意味しているのである。

このような現状をふまえ、調査活動を通じて、我々東北地方で学ぶものが生活し、学術活動を

行っている東北地方の生の歴史資料に触れ、それらの大切さを学び、地元のひとびとと出会う中で、互いに成長しあうことのできる場を提供できればと考えている。

具体的な調査活動であるが、発足以来一年度に一件のペースで調査を行っており、2003年3月末の時点で、武子市兵衛家文書（茨城県北茨城市、廻船問屋）、鈴木五郎兵衛家文書（山形県尾花沢市、豪農）の2軒分の調査を行っている。両者ともに仮目録が完成し、武子家文書については冊子目録刊行のための準備を進めている。2003年度は武者惣蔵家文書（宮城県亶理町、幕府城米御蔵役）の調査を行うことになっており、今年2月に第一回の撮影調査を行った。

作業は、現地調査と週一回の定例会を中心に行っている。現地調査では資料群の保管現状を記録し、資料毎に中性紙封筒への詰め替えを行った上で、デジタルカメラによる全点撮影を行っている。週一回の定例会ではこれを印刷したものを使用して目録を作成してゆく。成果については前述の冊子目録刊行のほか、調査結果を基に現地報告会を行い、地元への還元につとめることとしている。鈴木家文書については、2002年8月に尾花沢市で現地報告会を行い、地元の方との活発な意見交換がなされた。また、現地調査の過程で地元の方々から直接の調査対象以外の資料の所在情報が複数寄せられることが多く、そうした資料については、後日概要把握を可能な範囲で行うようにしている。

こうした通常の調査に加え、2002年3月には、仙台駅東口の区画整理事業で取り壊されることとなった、同市名掛丁の青果商・八百長商店（菊地長兵衛家）から段ボール約50箱分の資料を救出した。この資料は仙台市史編さん室の協力をえて保管されている。このような史料レスキュー的な活動も今後増えていくと考えられる。

調査の過程については、現地調査への協力依頼や、現地報告会など事情の許す限りオープン

にして行うよう務めている。歴史資料の保存を行うには、地域の人々の協力が必要不可欠であり、調査終了後も地域社会の側で継続的な資料保存体制ができるよう協力してゆくことが必要であると考えている。

発足2年半をへて、及ばずながらも一步一步活動を積み重ねているが、課題も山積している。特に参加者の確保については、もともと仙台地区において学生の絶対数に限りがあるという状況もあり重要な課題であるが、前述した2月の武者家調査では初めて東京からの参加者を得ている。今後とも所属にかかわらず、東北地方の歴史資料に関心のある方、資料保存活動に興味のある方の参加が広く得られればと思う。興味のある方は、事務局・佐藤までご連絡いただければ幸いです。

以上、本調査会の理念と活動状況について紹

介してきた。今後は、今までの調査の経験とそこでの様々な課題をふまえながら、今後も地域社会と密接に連携しつつ、東北地方の状況に適合した歴史資料の保存・活用についての方法論を追求してゆきたい。そして、東北地方において一つでも多くの歴史資料が保存され、活用されるために、当会の活動が少しでも寄与することができればと希望している。

事務局連絡先

〒982-0841 仙台市太白区向山1-1-20
第二グリーンハイツ瑞鳳104

電話・FAX 022-211-7131

E-mail dsato51@seagreen.ocn.ne.jp

(さとう・だいすけ / 奥羽史料調査会事務局)

史料保存にかかわる心配事

- 地震と津波からどうすれば史料を守れるか -

小田 康德

このごろよく和歌山県古座町を訪問する。本州最南端串本町の東となり、古座川が太平洋に注ぐところを中心に開けた町である。

古座町には、江戸時代末期から明治初期にかけての古文書が数千点、役場に保管されている。

町村合併へのうごきが進む中、この史料の保存を心配された町長が史料を保存するため、また、あわせて郷土に対する町民の歴史意識向上を図るため町史を編纂したいと申し出られたからである。

詳しいことは、このHPの「紀州だより」をご覧くださいになればわかると思う。

要するに、古座の地域に住み、その歴史を解明しようとする熱心な方々とともに、史料の保存と研究のための仕事にとりかかった。

具体的な内容は、史料の物理的な保存条件の整備を図るとともに、そこに住むひとびとが個々の史料を理解し、それを使って地域の歴史を究明する実力を確立すること。そのためのお手伝いをしようというのである。

なかなか難しい課題だ。ただ、ここでうれしかったことは、古座町地域にはたいへん多くの参加者がおられたということである。皆さん、本当に熱心なもので、驚くばかりである。これ

も詳しいことは、先ほどのページを見ていただければいい。

虫食いの問題。これほどひどいところを私はあまり知らない。これとどう対決するか。

和紙でありながら、湿気や虫食いで紙質自体が相当弱っていること。これも、ひどいものがある。

町史史料編の編集は、こうした問題を克服しつつ、その展望を開いてゆかざるを得ない。まことに息の長い、粘り強い努力が求められている。

ところで、保存をめぐる物理的条件の問題として、もう一つ浮上しているのが、地震に伴う大津波による被害の問題である。

来るべき、東海・南海の大地震に際し、古座町地域には最高8メートルを越す津波が押し寄せることが予想されている。

現在の防潮堤などは、一のみである。いまのままでは、町内の開けた地域は大被害を受ける。古文書も例外ではない。

これにどう対応するか。虫食いや湿気は時間をかけて史料を破壊するが、津波は、それが来たら、一気にすべての史料を消し去る力を持っている。

ともかく、地形上安全な場所に保存施設を設置すべきなのだろうが、どうすればそれがかなうのだろうか。

古座町役場保管の史料群は、狭い古座町にだけ関係するものでなく、県南部地域に広く直接関係しているし、もっといえば、全県の遺産でもあるし、全国的な価値も持っている。

これを何とか安全な場所で管理できるようにしたいというのが、今の私の願望である。

(おだ・やすのり / 大阪電気通信大学教授)

小田康徳氏主宰のホームページ「猪名川歴史研究所」(<http://www.jttk.zaq.ne.jp/bacas400/index.html>)の「わからん話に、わかった気分 B室」よりご本人の許可を得て転載したものです(編集部注)。

関連団体・会員からの情報

西摂研究会参加記

高久 智広

自分の住む「まち」がどんな歴史を持っているのか。これは歴史研究者だけでなく、すべての人が必ず一度は思いを馳せる事柄であろう。2003年2月8日、尼崎市立地域研究史料館で行われた西摂研究会は、尼崎中在家町々絵図の復元作業の成果を報告するものであった。市民の方が紙上に復元した絵図を、最終的にはデジタルデータ化し、公開していこうという試みである。手前味噌だが、以前、勤務する博物館の講座で、江戸時代の兵庫津絵図を現在の地図と比較しながら紹介したとき、「昔の絵図を元に散策してみたい」という声が少なからずあった。

だが尼崎と同様に、兵庫津も災害や開発で失われた歴史的遺産は多く、現在では近世の港町があったことを想像することすら難しい。失われた、いにしへの「まち」空間を復元することは大変な労力と時間を要する作業であるが、市民参加で行われたこの中在家町々絵図復元の成果が、地域に還元されるようになれば、市民にとって、自分の住む「まち」の歴史を探る大きな手掛かりになることは間違いない。今後の展開期待したい。

(たかく・ともひろ / 神戸市立博物館学芸員)

「第4回神戸都市史研究会」参加記

三村 昌司

去る2月24日(月)、神戸大学文学部において、第4回神戸都市史研究会が開催されました。この研究会は、神戸の歴史的事実の発掘は勿論のこと、近代都市形成史論の視点から西摂港湾都市神戸の近代化を照射し、神戸を通じて近代史都市形成史論の再構築を試みようとする目的で2002年6月から行われています。

今回の研究会では、平良聡弘氏による「兵庫(神戸)開港の交渉過程～『兵庫大坂規定書』の締結過程を中心に～」と題された報告が行われました。平良報告では、まず居留地を欧米列強の強圧下において強制的に開港を迫られた日本においてその圧力に現実的に接触する場と設定されます。その上で1867年5月に幕府と英

仏米蘭4ヶ国の間で締結された「兵庫大坂規定書」の締結過程を明らかにすることによって、居留地行政の実態を詳細に明らかにしていきます。しかし実態と乖離していた「規定書」は結果的に様々な矛盾を来すことになり、ゆえに1868年8月新たに「大阪兵庫外国人居留地約定書」が締結されることになる、と指摘されました。この歴史的過程を通じて、当該期の欧米列強からの植民地化の脅威の下での対外交渉は、ナショナリズム的解釈のみで解消されることなく、実態的視点からの分析と理解が必要であると論じるものでした。

当日は神戸大学・広島大学・大手前大学の教官をはじめ、西摂地域の大学院生・学部生も含

めた8名の参加があり、活発な議論が行われました。今後も神戸をフィールドとして近代都市形成史の再構築を目指しつつ、近代神戸の史料所在の情報交換・新事実の発掘など進めながら、年4～5回程度の日程で研究会を進めていく予

定です。

(みむら・しょうじ

/ 神戸大学大学院文化科学研究科院生)

2003年度大阪歴史学会大会のご案内

開催日 2003年6月29日(日)午前10時～

会場 大阪大学豊中キャンパス文法経研究講義棟(阪急宝塚線石橋駅下車徒歩約15分)

部会報告

(考古) 藤本史子「中世都市伊丹の考古学研究」

(中世) 田中慶治「戦国期大和国宇智郡惣郡一揆について」(仮題)

大田壮一郎「室町殿の宗教構想と武家祈祷体制」(仮題)

(近世) 森本幾子「幕末期における地域市場の展開 阿波国撫養を事例として」(仮題)

岩城卓二「幕末期摂津国一橋領における兵賦徴発について」(仮題)

(近代) 古川隆久「昭和戦時下の地方文化状況と娯楽統制」(仮題)

個人報告

(古代) 河野通明「民具の犁・牽引具調査にもとづく律令国家による長床犁導入政策の復原」

松下正和「都市・農村関係論からみた古代氏族『両貫性』の再評価」

日程の詳細や会場については、『ヒストリア』184号をご参照ください。

京都民科歴史部会 5月例会のお知らせ

日時 5月17日(土) 14:00～17:00

会場 京都薬科大学本校地 愛学館7階 第1会議室A

(JR・市営地下鉄東西線・京阪京津線の各山科駅から三条通沿いに西へ徒歩で約10分、五条別れ交差点北の東門より西へ直進つきあたり、または三条通沿いの南門からはいってすぐ)

内容 小林 隆氏(彦根市史編さん室)「自治体史の展望 - 「平成の大合併」にあたって - 」

滋賀県内では、現在、多くの自治体で歴史の編纂が進められている。自治体史の編さんは、住民が自分たちの暮らす地域の歴史をふりかえり、今後のまちづくりのあり方を考えるうえで、非常に重要な役割を負っている。しかし、現在のところ、多くの自治体史は、一部の先進的な事例を除き、住民が気軽に手にとって活用するには、構成・内容・体裁のいずれについても、その要求に十全に応えているとは言いがたい。また、今後、自治体の合併が進み、郡レベルの、あるいは郡の範囲を超えるような広域の自治体が誕生するならば、これまでの体制で自治体史を編さんすることは非常に難しいと言わなければならない。主として滋賀県の事例に基づきながら、自治体史の現状を検証し、今後の展望をひらく

問い合わせ先 京都民科歴史部会

〒607-8412 京都市山科区御陵四丁野町1番地 京都薬科大学南校舎 鈴木栄樹教室内

075-595-4711 E-mail kyotominka@hkg.odn.ne.jp

URL: <http://www.kyoto-phu.ac.jp/labo/kyouyou/eijjuszsk/kyotominka.html>

活動日誌

- 2003. 1.24 史料ネット神戸センター事務局、神戸大学文学部地域連携センター内に移転
- 2003. 1.27 第7回歴史資料ネットワーク運営委員会
- 2003. 2. 1 震災救出史料整理（於神戸大学文学部古文書室）
- 2003. 2. 8 第14回西撰研究会（河野未央氏が報告）
- 2003. 2.19 「震災資料の保存・活用に関する地域連携研究会」に参加（松下正和氏が出席）
- 2003. 2.25 第8回歴史資料ネットワーク運営委員会
- 2003. 3. 2 第1回「歴史文化をめぐる地域連携協議会」に参加（松下正和氏が出席）
- 2003. 3. 8 震災救出史料整理（於神戸大学文学部古文書室）
- 2003. 3.24 第9回歴史資料ネットワーク運営委員会
- 2003. 4.13 震災救出史料整理（於神戸大学文学部古文書室）
- 2003. 4.17 ニュースレター32号発行

受贈図書紹介

- ・芦屋市教育委員会社会教育部文化財課文化財係編『芦屋市文化財調査報告』第26,27,30~32,34~43号（同市・同市教委）（芦屋市教委社会教育部文化財課様より寄贈）
- ・『高山歴史学研究所文化財調査報告書第7冊 寺田遺跡』（高山歴史学研究所、2001年）（"）
- ・業平遺跡第52地点遺跡調査会編『業平遺跡第52地点発掘調査報告書』（2001年）（"）
- ・神戸大学百年史編集委員会編『神戸大学百年史』（神戸大学、2002年）（神戸大学百年史編集室様より寄贈）

<<編集後記 - 事務局だより>>

史料ネット事務局の移転と開室時間変更について

冒頭でもご紹介いたしましたが、史料ネット神戸センターの事務局は神戸大学文学部地域連携センター内に移転しました。住所が若干変更しましたが（神大文学部内であることには変わりないのですが...）、電話番号やメールアドレスには変更ありません。

専従の事務局員を置く体制に代わり、大学院生が日替わりで事務局に詰めるという体制がスタートして、おかげさまで一年を迎えることができました。皆様のこれまでのお力添えに感謝いたします。

昨年度は、火曜を閉室にしておりましたが、この4月からは平日の午後全て開室できるようになりました。史料ネット事務局活動に携わる若い世代の院生も増え、ネットの課題の一つである、「これまでの活動ノウハウの継承」という点においても心強い限りです。ひきつづき、今年度も皆様のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

（松下正和）



「人と未来防災センター」収蔵庫の見学風景

センターの震災資料専門員伊藤亜都子さんが震災資料の保存状況について説明してくださいました（2003年2月19日「震災資料の保存・活用に関する地域連携研究会」の際に撮影）

第4回 震災復興 市民歴史講座

神戸の空襲・戦災史をさぐる

史料ネットが昨年から取り組んできた「震災復興市民歴史講座」も、今回で第4回を迎えます。

今回は、阪神・淡路大震災の50年前、あの震災以上の規模で神戸を襲った大空襲をテーマに、神戸・阪神地方の空襲・戦災史に取り組む皆さんをお招きして、講演とディスカッションを行ないます。

いつものように、終了後パーティーを予定しているほか、午前中にはオプションツアーとしてウォーキングも用意しました。ふるってご参加下さい。

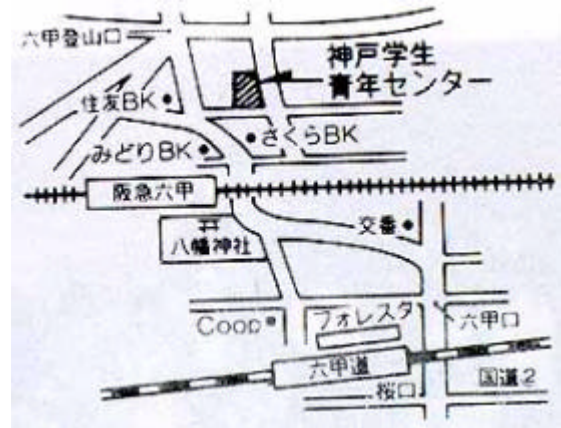
日時 2003年4月27日(日)

午後1:30～4:30(終了後パーティー)

場所 神戸青年学生センター

(神戸市灘区山田町3-1-1、TEL078-851-2760)

阪急六甲より北東徒歩3分、JR六甲道より北徒歩10分



内容

〔ウォーキング〕オプションツアーとして午前中、空襲により被災した現地を歩きます。

午前9時 生田神社参集殿前集合 (JR・阪急三宮駅より西200m) イスラムモスク 東福寺 阪急春日野駅前にて午前11時30分頃解散

ウォーキングのみ定員40人、参加料無料

〔講演とディスカッション〕午後1時30分～4時30分

「神戸大空襲について」 中田政子さん(神戸空襲を記録する会代表)

「米軍資料から見た神戸大空襲」 辻川 敦さん(火垂るの墓を歩く会)

「(ディスカッション)最近の取り組み・研究の動向と課題」

パネラー 佐々木和子さん(神戸大学文学部地域連携研究員)

飛田雄一さん(神戸青年学生センター)

正岡茂明さん(火垂るの墓を歩く会)

〔懇親会パーティー〕午後4時45分から (会費お一人様2000円)

参加お申し込みの方法 郵便、FAX、e-mailにより史料ネットにまで。定員100人。

当日は資料代として500円(会員は半額)をいただく予定です

主催 歴史資料ネットワーク 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部内

TEL/FAX078-803-5565(直通) e-mail s-net@lit.kobe-u.ac.jp

共催 神戸空襲を記録する会 後援 神戸青年学生センター

----- (切り取って上記史料ネットまで郵送またはFAXしてください) -----

参加申込票

ご氏名		年齢 () 歳	男 ・ 女
郵便番号	〒 -	電話番号 ()	-
ご住所			
参加されるパートを囲んでください	〔午前〕ウォーキング / 〔午後〕講演会 / 懇親会パーティー		

(予告)

歴史資料ネットワーク2003年度総会と
フォーラム「歴史資料の保存・活用と地域社会」のお知らせ

日時：2003年5月17日(土)
13:00~17:00

場所：尼崎市小田公民館
(JR尼崎駅北東・徒歩5分)

スケジュール：
13:00~13:50
歴史資料ネットワーク2003年度総会
14:00~17:00
フォーラム

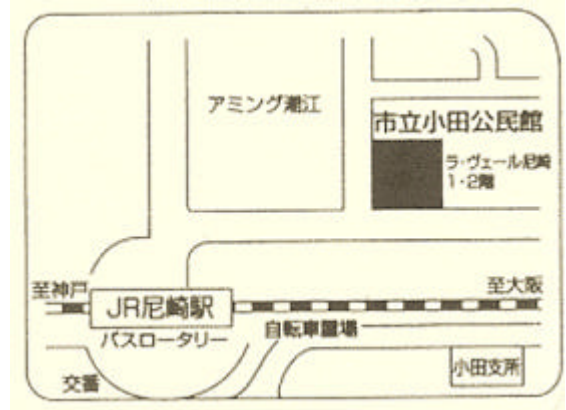
「歴史資料の保存・活用と地域社会」

講演... 芝村篤樹氏(桃山学院大学教授)

「地域史料の保存と現代歴史学の課題」

コメント... 奥村弘(歴史資料ネットワーク代表)

ほかを予定



個人会員への入会と

“News Letter”購読のお願い

史料ネットの活動に、平素からご協力いただき、ありがとうございます。

歴史資料ネットワークは、改組後も引き続き“News Letter”を年4回発行いたします(年間購読料：郵送費込み1000円)。改組とともに今後内容を更に充実させる努力を重ねて参ります。皆様方には引き続きご購読いただきますよう、よろしくお願い致します。

また、表題にもありますように、ニュースレター会員・贈呈読者の皆さまには是非とも個人会員へのご入会(年会費：個人会員5000円、学生・院生会員は半額)ないしサポーター(1口3000円以上)としてご支援いただき、史料ネットの発展にご理解・ご協力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

史料ネット郵便振替口座

名義 歴史資料ネットワーク 口座番号 00930-1-53945

史料保存関係のホームページ「Archivist in Japan」を開設している小林年春さんのご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに掲載していただいています。
<http://www.archivists.com/> または <http://member.nifty.ne.jp/archivists/>
または <http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/>

史料ネット NEWS LETTER No. 32 2003.4.17(木)

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部地域連携センター内

TEL/FAX: 078-803-5565 e-mail: s-net@lit.kobe-u.ac.jp

URL: <http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/welcome.html>